2004年度 修了

J・クリシュナムルティにおける脱暴力論
－ＤＶ加害者教育のオルタナティブな可能性－

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター

今日、様々な形で起こっている暴力には、社会的な要因と共に、人間の内面的な暴力が深く影響している。本論では脱暴力へのアプローチとして、内的暴力を追求した J・クリシュナムルティの暴力論をとりあげた。また、彼の理論の検証として、ドメスティック・バオレンス加害者の語りを参考にした。クリシュナムルティは、個人の内的特質と世界の相互依存関係を表した「世界はあなた」という世界観によって、自己の内的暴力と外的暴力との循環や、心理的な時間と暴力との関係を示唆した。それを「共時性」の重視と捉え、時間を軸にして、暴力の要因となる「恐怖」や、彼の脱暴力の方法である「気づき」について考察した。

暴力を内的・外的に、いま、ここに事実として存在している「あるがままのもの」に対する抑圧や支配と捉えると、怒りや恐怖などの感情に対して制御や否定を行うことや、また暴力と非暴力を対立させて捉えることは、事実の探求や理解を妨げるものとなる。人が心理的な過去と未来において自己中心性から生じる「ひとかどの者」でありたいとする時、自己の周りに境界を生みだし、様々な葛藤を生む。これに対し、開かれた「現在」における直接の関わりと、他者との共時性が、世界にかかわる「責任」となるのである。

怒りや恐怖は暴力と関係の深いものである。突発的に見える怒りにも、個人的・集団的な記憶や思考や意志が働いている。恐怖の背景には、未来への動きが作用し、それが安全や理想を追求している。また、過去への動きは知識や記憶、自己や他者へのイメージを生み、あるがままの自己や他者を見ることを妨げる。恐怖と直面することからの逃避は、自己からの逃避であり、様々な依存や同一化を生むが、それらには過去・未来を連想する思考の働きが作用している。現代において価値が高いとされている理想への努力や、思考や知識の蓄積は、暴力と無関係ではない。

これらの過去・未来に属するものに対して、脱暴力の方法として考えられる「選択なき気づき」は開かれた現在にあり、受動性を持つ全体的な気づきである。この気づきは一切の力の行使なしに行われ、断片化し、葛藤している自己の内面の全体性を取り戻すものである。それは、思考や知識によらず、成果や結果への意志なく、ことがらへの直接の気づきである。本論文の最後では、現代の脱暴力教育の方法の一つとして、この気づきの意義と可能性について考察した。